第二章　東広小路（ひろこうじ）賭け矢

一

安永（あんえい）元年も残りの３日、坂崎磐音が鰻屋の宮戸川（みやとがわ）で大掃除の仕事をもらった。

親方の鉄五郎が鰻裂きの松吉を使いに寄越したのだ。

「怪我をしたからって、何も遠慮することはねえじゃありませんか」

「仕事をできぬに顔を出すわけにはできません」

「金兵衛さんに聞いたが、内藤新宿まで仕事を探しに行ったってね。呆れたねえ、命を張ったってのに、お侍三人の懐に残ったのはたったの二朱ですかい」

「金を稼ぐのはなかなかむかしいものですね」

「おめえさんと話していると、年の瀬（としのせ）だということを忘れそうになる」

と苦笑いした鉄五郎が訊いた。

「怪我の具合はどうですか」

「もう大丈夫です。年明けからは働かせていただきたい」

「こう押し詰まる（おしつかる）と鰻屋は客が少ないが、さし当たって（さしあたって）今日は、包丁なんぞを研いだり（とぐ）店の掃除をしたりして、いくらか小銭を稼ぎなせえ。飯だけは三度三度食い放題だ。」

「いや、助かりました」

新宿から戻って腹を減らす日々が続いていたのだ。

鰻裂きの同僚の松吉と次平（じへい）と組になって二階から掃除を始めた。

天井や壁の煤（すす）を払い、畳を上げて北の橋に日干し（ひぼし）にして竹の棒で叩く。

「おや、浪人さん、鰻裂きから掃除やに格落ちかい」

鰻を宮戸川に持ってきた幸吉（こうきち）が声をかけた。

「年の瀬は鰻より蕎麦だそうだ。それでも親方が掃除の手伝いでもしろと雇ってくださった」。

「新宿は稼ぎにならなかったってね」

誰から聞いたか、すでに幸吉は知っていた。

「ああいうのを**骨折り損（ほねおりぞん）**の**くたびれ儲け**というのであろうな」

「品川の次男坊は、小梅村の川で尻をからげて蜆（しじみ）採りをしていたぜ」

「品川さんは蜆採りか。来年になれれば風向きも変わろう、それまでの辛抱だな」

「独り者は呑気でいいな。うちみてえに家族が多いと一日一日が死にもの狂いだぜ」

「幸吉どのは顔が広い。それがしにできる仕事があれば何ぞ紹介してもらいたい」

「待てよ」

幸吉が言った。

「何か心当たりが…」

「浪人さん、何でも遣るいい」

「お上の定法に触れぬことなら、何でもやらせてもらおう」

「待ってな。ちょいとたしかめてくらあ」

そういったときには幸吉はからの竹籠（たけかご）をかたかた鳴らして走りだしていた。

磐音はまた畳の埃を叩く仕事に戻った。

十一歳の子供の言うことを真に受けたわけではないが、磐音はなんとなく幸吉が再び顔を出すのを気にかけながら二階から階下と掃除を終え、昼下がりには店中（みせじゅう）の包丁を裏庭に集めて、丁寧に研いだ。

一時半（いっときはん）ばかりかけて刃物も研ぎ上がった。

そろそろ夕餉の刻限だ。

そんな頃合い（ころあい）に、裏木戸（うらきど）から幸吉が顔を出した。

「仕事を見つけて来たぜ」

と得意そうな顔をした。

「本当か、幸吉どの」

十一歳の子供とはいえ、幸吉は出会った時から本所深川の師匠のようなもの、頭が上がらない。

「嘘言ってもしょうがないや。両国広小路の楊弓場だ」

「矢場のことかな」

「他に何がある。相手はすぐに会いたいと言っているんだ、行くぜ」

幸吉がポンポンと言った。

「ならば親方にお断りして参ろう」

幸吉を待たせて店の台所に入っていった。すると親方の鉄五郎が、

「おかげで家中（うちじゅう）がさっぱりしましたぜ。夕餉には酒をつけましょう。」

と言ってくれた。

「それが…」

磐音は幸吉がもたらしてくれた話をした。

「両国橋際の矢場ですかい」

鉄五郎は裏庭に出ると幸吉に

「幸吉、坂崎さんに何の仕事をさせようというのだ」

と問い質した。

「親方、怪しい仕事じゃないぜ。近頃、楊弓場を荒らし回る男たちがいてさ、けっかいとかいう賭け矢を申し込んでよ、楊弓場から金をふんだくっていくと聞きこんだからさ、どこぞの楊弓場に用心棒はいらねえかと訊いて回ったんだ。そしたら、東広小路の金的銀的の朝次親方がさ、いいだろう、腕がいいなら連れてこいと言ってくれたんだよ。」

「金的銀的がな」

と納得した鉄五郎が磐音に

「話を聞く分にゃあ損はありますまい。折り合いがつかなきゃまた戻って来ればいい。」

と送り出してくれた。

磐音と幸吉は**暮れ初めた**（くれそめる）堀沿いに竪川に出た。それを大川へ下り一つ目の橋を渡った。すると両国広小路の喧騒が川風に乗って聞こえてきた。

明暦三年の大火の折、大川の西際（にしぎわ）で十万余人（じゅうまんよじん）の死者を出した。

そこで幕府で寛文（ひろふみ）元年に大川を結ぶ橋を架けた。

これは両国橋である。

発端（ほったん）は発端、東西（とうざい）の橋際に火除け（ひよけ）地を広く設け、両国広小路とした。

東詰の広場では背後に回向院（えいこういん）を控え、昼前は葛飾（かつしか）や小梅村など近在の百姓衆が野菜物（やさいもの）を持って集まり、青物（あおもの）市場が立った。昼からは市場のあとをきれいに片付けて、小屋掛け（こやがけ）の見世物が客を呼び集めた。

一日中、人の往来が絶えないところが両国の広小路である。

金的銀的は小屋掛けではなかった。

東詰の水垢離場（みずごりば）前に間口（まぐち）五間の矢場を構えていた。

障子（しょうじ）に金的を射抜く（いぬく）当たり矢が描かれ、島田髷に黄八丈（きはちじょう）をぞろりと着た矢場女、矢返したちが四、五人もいた。いずれも若くて見栄え（みばえ）もいい。

客が三人、二尺八寸ほどの半弓（はんきゅう）を引いていた。

なかなか本格的で、八間ほど先に土塁（どるい）が設けられ、大小の的が並んでいた。

一尺ほどの短矢が当たると若い女が太鼓を叩いて、

「当たり！」

と叫んだ。

どこかのどかで、殺伐（さつばつ）とした風はない。

「女将さん、連れてきたぜ」

店でただ一人の年増女（としまおんな）だ。

「親方なら水垢離（みずごり）場で煙草を吸ってるよ」

と教えてくれた。

両国東広小路の水垢離場は、大山参りに行くものたちが斎戒沐浴（さいかいもくよく）して身を清める（きよめる）ところだ。

暗がりの中、蛍のようにぽっぽっとした火が見えた。

親方の朝次はどこからか帰ってきたようだ。

「親方、この浪人さんだ」

暗闇から磐音を観察している様子が窺われた。

「金的銀的の主の朝次です、金兵衛長屋に住まいだそうですね」

丁寧な口調は大家の金兵衛を承知している様子だった。

「夏から世話になっております」

「あなたの人柄と腕前は今、金兵衛さんに聞かされてきました。うちじゃあ、ちょいと…」

「親方、浪人さんの腕じゃ、物足りないというのかい」

「幸吉、早とちりするな。うちのような商い（あきない）では、坂崎様の腕前は立派すぎると言っているんだ。」

「親方」

磐音が話しかけた。

「金兵衛どのと話されたのなら、お分かりでしょうが、火事の後始末などをして日傭取り（ひようとり）をしていたのです。どのような仕事でもいたす所存（しょぞん）にござる。

相手はしばらく沈黙した。

「仕事のことは幸吉からお聞きですか」

「矢場を荒らす者たちがいるということにございますな」

「小屋掛けから常設まで、矢場は派手なようですが、三十本六文の商いですよ。矢返しの女を雇い、三十本も矢を射たれて六文では成り立ちません（なりたつ）。そこでお上には内緒の賭け矢をどこもが行います。ご存じですか。」

「残念ながら矢場に出入りしたことはござらぬ」

「ならば説明いたしましょうかな」

結改（けっかい）という競射（きょうしゃ）の矢数（やかず）は二百本、もともと遊びだった。

それが一文を紅白の紙に包んでの賭け矢になった。

今では一本いくらの裸銭（はだかぜに）で矢場と客の双方が弓を引いて、その二百本の差額で競ったり、二百本の勝ち負けで客か店の総取り（そうどり）勝負になるという。

「秋口から浅草当たりの矢場に出没し始めたのは、女を含む五人組です。若衆（わかしゅ）姿の優男（やさおとこ）が頭分で、美形の女、隠居風の爺様、無精髭（ぶしょうひげ）の浪人に、どこぞのお店者といった風情（ふぜい）の男の五人連れで、一人か二人でふらりと矢場に現れては、賭け矢を挑むようになりました。それがまた見事な腕前だそうで、二百本のうち外すのはせいぜい五、六本、浅草門前の大文字矢の大勝負では、女が二百の総当りを出したそうです」

「大勝負と申されたが、賭金はいくらですか」

「大勝負となればまず五十両」

「なんと…」

磐音は絶句した。

「川向うでだいぶ評判が立っているらしく、富岡（とみおか）八番宮か東広小路にやつらが稼ぎ場所を移してくるという噂が立ちまして、東広小路にある十三軒の矢場が何度か会合を持ったところなんで」

「断ることはできないのですか」

「江戸っ子ってのは困った性分でね、客に勝負を挑まれれば受けて立つ」

「対策は決まっておらぬのですか」

「議論百出といえば聞こえはいいが、まとまりがね**ったらありゃしない**。私としては十三軒が纏まるのが一番だと思っているんですがねえ」

そう嘆いた朝次は煙管（きせる）をぽんと手のひらで叩いた。すると燃え残った煙草の火が水垢離場に飛んで。

じゅっ

と音を立てて消えた。

「川向うでは何軒もの矢場が奴らのために潰れています」

「主どの、それがしは何をなせばよいのですか」

「厄介なことに、五人組は腕が立つらしい。浅草の一軒が用心棒を雇って、帰り道を襲わせたそうな。ところが反対に若衆（わかしゅ）の優男（やさおとこ）に斬られて、一人が死に二人が大怪我を負った。**こちとら、ご禁止の賭矢をやっている手前、町方にも届けられないでいる**。そこで、先ほどから話しながら思いついたんだが、十三軒が纏まって、坂崎さんを雇えないかと考えているんでさ。」

「賭矢に勝って帰る五人組をそれがしに襲えと言われるのですか」

「そんなことはできっこありませんよ」

朝次が声もなく笑った。

「さっきも言ったが、端から断るのが一番だがそうもできない。一度目の負けはしょうがない。奴らの足代（あしだい）だ。だが、二度目はごめんだ。奴らにもう二度と東広小路で仕事をしないでくれと私の方から頭を下げようと思う。この際、面子なんて構ってられないからね。その時、私に付き添ってもらえませんかね。」

「承知いたした」

「問題は給金だ。立派なお侍に何百文なんて話はしたくないが、いつ来るとも知れないやつらを待ち受けるんだ。十三軒から五十文ずつ出せば一日六百五十文、あいつらとやり合うときは特別手当を出しましょう。それでどうですね。」

一日六百五十文は、職人の手間賃と同じくらいだ。

「結構です」

「ならば今晩から付き合ってもらえますかね」

磐音はありがたく受けると、

「幸吉どの、助かったぞ」

と幸吉に頭を下げた。

矢場の裏手に小さな休所があった。

矢返しの女達が時折煙草を吸ったりなど息抜きに来る。

部屋には火鉢（ひばち）に炭がいけられ、薬缶（やかん）がかかっていた。床の隅には女たちが食い散らかした蕎麦の丼や茶碗が積んであったり、灰で汚れた煙草盆や表紙の黄ばんだ絵草紙があったりした。

若い女たちが出入りするだけに、脂粉（しふん）の香りが充満した（じゅうまんする）して息苦しいくらいだ。

磐音はまず格子戸（こうしど）を開いて、部屋の空気を入れ替え（いれかえ）、汚れた丼や煙草盆を部屋に隣接した狭い台所に運んで洗った。さらに、先のちびた箒で掃き出すと、だいぶさっぱりした。

大包平を部屋の壁に立てかけ、格子窓のそばに陣取った。

「おや、部屋が見違えるようにきれいになってるよ」

矢返しの女が二人、部屋の入り口で目を丸くした。

「お侍さん、お前さんがやったのかい」

姉さん株のおんなが訊いた。

「気に障ったら許してくれ。暇でな、つい手を出した。」

「部屋をきれいにしてもらって誰が怒るものかね」

大柄な体格の姉さんが火鉢の前にべたりと座った。二十一、二か。

もうひとりの小柄な娘は十七、八か。

磐音は火鉢の薬缶（やかん）から急須に湯を移しながら、

「それがしは坂崎磐音と申す、よしなに頼む」

と頭を下げた。

そりゃどうも、と慌てた姉さんが、

「あたしはおよしでこっちがおうめちゃん」

と名乗った。

「無調法だがどうぞ」

磐音が淹れた茶をおよしが受けながら、

「旦那に用心棒を雇ったと聞いたけど」

と笑った。

およしが煙管（きせる）を出して刻みを詰めた。

磐音が煙草盆を差し出した。

「なんだが吉原の花魁になった気分だ、落ち着かないよ」

お良がケラケラと笑った。

「坂崎さんは浪人なの」

「半年ばかり前に禄に離れた。なりたてだ」

「どうりで能天気だ」

「いや、これでもいろいろと苦労しておる」

内藤新宿に仕事を求めて行った顛末（てんまつ）を、差し障りのないように変えて話し聞かせた。

「ええっ、男が三人も内藤新宿くんだりまで行って、懐に残ったのが二朱足らずなの」

「三人で分けたら百七十文足らずでな、一日持たなかった」

「呆れたね」

おうめが黙って磐音に紙包みを差し出した。

「薄皮饅頭の残りだけど食べますか」

「ありがたい、夕餉を食いはぐれてな」

磐音は包を押しいただき、茶色の皮が固くなりかけた饅頭を口にいれた。

「おっ、これはうまい」

娘二人は幸せそうに饅頭を賞味する磐音の無邪気な顔を眺めやって、

「こりゃ、**どこぞのぼんぼんか、偉い食わせ物だ**よ」

と、お良がおうめに囁いた。

煙草を吸ったおよしとおうめが矢場に戻ると、入れ替わりにおたつとおきねが顔を見せた。二人とも十七、八だ。

おたつは丸ぼちゃ、おきねはうりざね顔の美人だった。

「あたしたち、偉くなったみたい」

おたつとおきぬは身をよじらせてけらけら笑った。すると若い娘の香りが狭い部屋に漂った。

「お侍はどこに住んでるの」

おたつが訊く。

「それがし、坂崎磐音と申して、深川六間堀町の金兵衛長屋に厄介になっておる」

「なんだ、うちと同じご町内だ。」

と言ったのはおきぬだ。

「あたし、猿子橋際の唐傘長屋」

「おうおう、天気ならば堀端に傘が干してあるところか」

「それそれ。金兵衛さんの子供の時から怒鳴られながら育ったわ」

と笑ったおきねは、

「うちのおよしさんと金兵衛さんの娘さんは同い年よ」

「なにっ、おこんどのとか」

「あれ、おこんさんを知っているの」

「知っているもなにも、西広小路の今津屋どので仕事を頂いたことがあってな」

磐音に共通の友達がいたこともあって、女たちはすぐに気を許してくれた。入れ替わり立ち代わり四人の娘たちが茶を飲みに来ては、磐音とおしゃべりしていった。

一日の仕事はあっというまに終わった。

金的銀的の暖簾（のれん）が下りたのは、五つ半前のことだ。

朝次と女将のおすえが娘たちに日当（ひあて）を払い、ご苦労さんと送り出した。

「坂崎さん、すっかり女達の信用を得られたようですね」

朝次が笑い、おすえが、

「この部屋が見違えるようだもの」

と驚いた。

「なにもすることがないでな」

朝次は三百文を差し出すと

「明日からはちゃんと六百五十文をお払いしますからな」

と断った。

「親方、今晩は見習いでこざる。ご懸念なく。」

磐音が断ると。

「まあ、そう言わずに蕎麦でも食べていらっしゃい」

と掌に握らせた。

「明朝はいつ店開きにござるか」

「広小路は昼下がりにならないと見世物は駄目なんでねね、９つ半時分（じぶん）にきてください。」

「相、分かった、よしなに頼みます」

磐音は親方夫婦（ふうふ）に頭を下げると大包平を手にした。

二

金兵衛長屋に鰯の触れ売りが入ってきたのは、磐音が井戸端で顔を洗っている４つの刻限だ。

内職をしていたおんなたちがわいわいがやがやと集まってきて鰯を購った（あがなう）。

「一尾（いちび）いくらかな」

棒手振り（ぼてぶり）が磐音の顔を見て、

「浪人さん、**初鰹を買おうってんじゃねえんだぜ。鰯一匹といわれてもな**」

「ならば、五十文ではいかほどかな」

「今日は形がいいや、十五、六匹は買えるぜ。お前さん、丸干しにでもする気かい。」

「いや、ちと礼をしたくてな」

「なら、おまけしてやらあ」

どてらを着込んだ金兵衛が笊（ざる）を持って姿を見せた。

「坂崎さん、朝次んとこで仕事が見つかったかい」

「大家どののご推挙（すいきょ）で、なんとか職を得た」

「お前さん、仕官したわけじゃねえんだから。矢場の用心棒に雇われただけだよ」

「仕事は仕事でござる」

まあな、と返事する金兵衛に訊いた。

「幸吉どのの長屋をご存じか」

「ははあ、この鰯の礼に持って行こうと言う算段かい。律儀だな」

金兵衛は、唐傘長屋のどんづまりが幸吉の長屋だと言うと、

「おい、新次、鰯を持っていく先は食い盛りの餓鬼（がき）ばかりだ。たっぷりとおまけしろよ」

と棒手振りに指図した。

磐音は自分のために三匹を取り分け、残りの鰯を金兵衛の竹笊（ざる）を借りて盛った。

金兵衛が口を利いたせいで十五、六匹はありそうだ。

その足で唐傘長屋を尋ねた。

相変わらず傘を干してある木戸口を抜けると素顔（すがお）の娘が、

「あら」

と驚きの声をあげた。

「そうか、そなたの長屋だったな」

「幸吉どののお長屋はどちらかな」

「おしげおばあさん、幸ちゃんの友達が訪ねてきたわよ」

おきねが笑いながら、井戸端で洗濯する女に声をかけた。

振り向いたおしげの鬢（びん）に膏薬（こうやく）が張ってあるのが見えた。

「金兵衛さんとこの浪人さんだね」

磐音は竹笊の鰯を差し出すと、

「昨日、幸吉どのに結構なお仕事を紹介していただいてな、お礼に参った。」

「こりゃ、どうも」

ぺこりと頭を下げて竹笊を受け取ったおしげにおきねが、

「坂崎さんね、うちで働くことになったの」

と説明した。

「幸吉がそんなことをしたのかい、ちっともしらなかったよ」

おしげが嬉しそうに言う。。

「浪人さん、ありがたくいただきます」

と竹笊を差し上げた。

磐音が東広小路に行くと、白衣（はくい）を着た男たちが、水垢離ばで寒の流れに見をつけていた。年明け早々に大山参りに行く連中だという。

だが、矢場の金的銀的はまだ店を開けてなかった。

磐音は水垢離場之石段（いしだん）に腰を下ろして、沐浴の風景を見ていた。

久しぶりに飯を炊き、朝餉と昼餉を兼ねて、焼き鰯で三杯飯を食べて満腹（まんぷく）していた

師走（しわす）の日差しがのんびりと落ちて、なんとものどかだった。